統合と多様性を学ぶ

大阪府議会ヨーロッパ行政調査団メンバー
大阪府議会議員　　中村哲之助

１１月１６日（日）～２４日（月）にかけて、「大阪府議会ヨーロッパ行政調査団」の１３人の議員はイタリア・フランスを訪問し、大阪が直面している都市再生について、産業政策や再開発、都市機能などの先進事例を学びました。

少し長いレポートですが、できるだけ分かりやすく、スケジュールに合せて報告します。詳細な調査団全体の報告は別にまとめて発表しますので、ご期待ください。

なお、このレポートは訪問先の人口や財政・言語など、年鑑や統計資料などによって容易に把握できるものはあえて省略しています。「百聞は一見にしかず」と言われるように、現地でしっかりと見聞し、また現地でしか知りえないこと、気付いたことを中心にまとめています。

●関空からフランクフルトへ（16 日）

私たち調査団は 11 月 16 日 8 時 15 分に集合し、関空内の会議室「なみはや」で簡単な説明と結団式を行い、出国手続きへ。あの悲惨な９・11 テロ事件以後、どの空港も手荷物などの検査がより厳重になり、これまでと比べて相当な時間を要します。事件や事故防止のためには当然のことですが、これからも世界の、とりわけわが国のすべての空港や航空機が安全であってほしいと願わずにはおられません。なお、海外へは最近出かけていなかったので、出入国管理カードが廃止されたことを、その時まで気付きませんでした。

ルフトハンザ航空のＬH741 便で 10：30 に離陸し、一路ドイツのフランクフルト・ラインマイン空港へ向かいます。飛行時間は約 12 時間 15 分で、夜の 10：45 頃（現地時刻は午後 2：45）に到着の予定です。機内で上映される映画を見たり好きな小説を読んだりしていると、時間はすぐに経ってしまいます。

フランクフルトには予定よりも少し早く、午後 2：25 に到着。飛行機のドアが開き、ヨーロッパの第１歩。Ａグループは飛行機を乗り継いでベニスへ、私たちＢグループはバスでフランスのストラスブールへ向かうことになっています。入国の手続きなどを終えて空港の外に出ると、真昼でも北緯 50 度を越えているため、さすがに日本よりはよく冷えます。

空港を出て、バスに向かうＢグループ
（左から徳丸・大前・中島・中村・梯・品川の各議員）

空港の出口の所で、現地の世話役（ガイド）のハールさんのお出迎えを受け、バスに乗車。外はあいにくの小雨ですが、外はまだ明るく、アウトバーンを 10 分程度も走ると、すっかり田園風景に変わります。そして日本の高速道路を走っている時と「どうも様子が違う」と感じていると、ガイドのハール氏が「ドイツでは日本と違って、土･日に営業用のトラックは絶対に走りません。皆さんはめったにトラックなどを見ることはないでしょう」と説明。途中のドライブインでトイレ休憩に立ち寄ると、その説明どおりで、隣の駐車場には運転手が不在のまま、ホロを被ったトラックが無数に駐車していました。改めて、国情の違いを知ります。こんな些細な話の中に、思いもかけないヒントがあったり、政治に役立つことがあるので、早速メモと写真撮影です。

なお、ハール氏は、日本に 10 年余り前まで滞在され、金沢大学で 6 年間もの間、講師をされていたとかで、抜群の日本語（とりわけ関西弁）と知識をお持ちでした。来年には再び金沢大学を訪ねられるようです。

ドライブインでコーヒータイム（左は大前議員）

またハール氏は、ドライブインに停まっている車を指差して、下の写真のように、左端の星で作った円形はＥＵを表し、その下のＤはドイツ（フランスならＦ）を示し、その右側のシールはそれぞれ車検と納税が正しく行われていることを証明するもので、アルファベットは一文字であれば大都市を、二文字であれば中小都市を表すと説明されました。何か、ＥＵとその加盟国の関係が少し分かったような気がします。午後５：57 にホテル到着ですが、閑散としているため、宿泊客は我々だけなのかと思うほどです。

●ストラスブールでＬＲＴに乗車する（１７日）

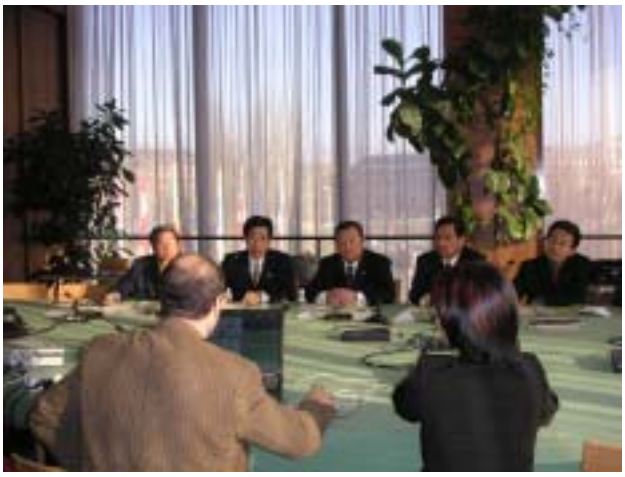
ホテルを８：30 に出発し、Ｂグループの視察の中心であるストラスブール市役所を訪問。この日の通訳はヴァンソン藤井由実さんです。

人口２５万人のストラスブール市と近隣の小規模自治体２７で構成するコミューン（人口４５万人）

の副議長（№３）ジャン・ルイ・エルル氏らに出迎えられました。

ここではＬＲＴを担当されているクリストフ・ナギヨ氏が、建設までの経過とこれからの計画を説明。現在の走行距離は25ｋｍで、後13ｋｍ分延長したいこと、現在の人口４５万人中１９万人が毎日利用していること、都心部への車の乗り入れ規制を促すための駐車場を整備していること（パーク＆ライド）などを、具体的にスライドなどを示しながら説明されました。

＊ＬＲＴ　　ライト・レール・トランジットの略で、低床式の路面電車のこと



また同氏は、①ＥＵ議会の議場まではトラム（ＬＲＴ）が整備されていないので、2006年度までに完成させ、ＥＵ議員にもこれを利用してもらい、イメージアップを図りたい、②市民の足をどうすれば確保できるかという観点から行っているもので、財政上の見地からは一切検討してきていないし、これからもそうだ、と熱弁を振るわれました。

一方、調査団の議員の側からは、

① 市役所へ来るまでに見てきた、また地図の上でも示されている数多くの水路・川などを利用した水上交通への考え方はどうか
② 今後の延長計画と財政負担はどのように予測しているのか
③ ＬＲＴを核として、どんな街づくりをイメージしているのか
④ 毎年の運営に要する費用負担はどの程度になるか
⑤ 利用料金の考え方、無料化などは検討されたのか
⑥ 現在の公営を民営に、また民間参入を進めるという計画はあるのか
⑦ 導入時の市民の考え方、反対運動などはどうであったのか
⑧ 環境汚染問題とのかかわり、住民の今日での評価はどうか
⑨ 延長計画に対する住民意識はどうか
⑩ アルザス地方（ストラスブール市のあるフランスの東北部）と、共同体との税財源の配分はどうなっているのか

などの数多くの意見が出されました。

◆2～3分待つだけで乗れるＬＲＴ

昼前まで庁舎内で学習した私たちは、いよいよ同氏の案内でＬＲＴに乗車です。聞いていたとおり、本当に段差もなくフラットで、歩道を車椅子で来た障害のある人でも、自分ひとりで簡単に乗車できます。また、道路とＬＲＴの線路（軌道敷）も、まったく凸凹なし。１時間フリーチケットで1.2ユーロです。全員が感心しながら約１時間余りの体験を終えました。

この後、ＥＵ議会の見学に向かいましたが、大規模なデモのため、通行規制がかけられ、やむなく途中からホテルへ戻りました。

◆知事選をめぐる様々な動きがＦＡＸで

大阪を出発する前から大きな話題になっていた「江本氏」の去就や、「太田知事」の動向についての新聞記事や各種文書が、FAX でホテルに届いています。全員で夕食時にこれを議論。遠く離れているだけに、余計気になります。

●総領事館へ　ＥＵへの理解が深まった（１８日）

この日は、昨日のデモのために行けなかったＥＵ議会を見学のためにホテルを早めに出発。ＥＵ議会は毎月第３週に開催され、ヨーロッパ全土から約 600 人余りの直接選挙で選ばれた議員とそのスタッフが集中し、大変なようです。約 4000 人の人々が仏独国境付近のアルザス地方へ来られるのに、交通手段が十分ではなく、ＥＵ議会をもっと便利な場所に移せばどうかという声が数多くあり、フランス政府はこれを守るため必死になっているようです。

総ガラスのＥＵ議会

ＥＵ委員会の建物前で

私たちはガラス張りの見事なＥＵ議会の建物などに感心した後、10：20 に在ストラスブール日本国総領事館を訪問し、山口英一総領事と懇談しました。その後、大平次席や村田政治経済担当領事らからストラスブールの最近の事情や、ＥＵについての説明を受けました。

それによると、ＥＵの三権の所在地が同一地域に設置されていないのは、各国の外交交渉によって決められたためのようです。

総領事館で懇談する議員団

また、1994 年のマーストリヒト条約によってＥＵは大きく前進し、とりわけ共同市民権・共同決定権が拡充しました。従って、農業や通商などは各国が既にＥＵにその権限を委譲しているので、日本の国益を守るために、総領事館は各国代表である議員や、ＥＵの政党代表者へのアタックなどが必要で、その動向には細心の注意を払っているとのことです。

私たちはこれまでＥＵは、イギリス・フランス・ドイツ・ベルギー……というように、それぞれの国が、互いにその連携を図りながら行動していると思っているところが多分にありました。しかし現実にはそうではなく、むしろ、ＥＵ合衆国フランス州、ＥＵ合衆国ドイツ州のように考え直さなければ、今日のＥＵは理解できないということが判りました。欧州憲法条約の議論が行われ、軍隊の統

一まで実施しようという議論が現実になされていることを聞き、改めてＥＵ各国の「統合」への強い決意を知りました。

一方、今日の最大課題の一つである「イラク戦争」への評価や支援体制の違いなどから、ＥＵでの各国の動きも少なからず影響を受けているようです。

ＥＵは元々、仏・独・伊とベネルックス３国の合計６ヶ国でスタートしたものですが、来年４月には 25 ヶ国になり、さらに、ブルガリア・ルーマニアが加わり、27 ヶ国になる予定です。スイス・ノルウェー・アイスランドは未加盟ですが、ウクライナの加盟問題もあり、結局ヨーロッパは一体どこまでなのかということになっています。

必要な政策は可能な限り統合し、その一方で地域の持つ多様性を生かしていくことを重視しているＥＵは、正に 21 世紀の私たちの進路を示しているといっても過言ではないでしょう。

総領事館を辞した私たちは昼食後、バスに乗車し、フランクフルト・ラインマイン空港へ約３時間の移動です。バスから見る風景は、来た２日前とはすっかり様相が変わっています。今日は平日で、日本の高速道路と同様に、すごいトラックの通行量です。また、「これまで国境付近には必ずあった検問所も廃止され、当時の検問所や兵舎は今、難民の収容施設に転用している」と、ガイドのハールさんの説明に耳を傾けながら、ライン川の傍にあるその施設を目の当たりにし、私たちの視野が本当に狭いものだということに気付きます。空港へ到着した時にはもう辺りは薄暮です。私たちは 17：20 発のＬＨ5580 便で次の訪問地ミラノへ向かいます。ミラノ到着後Ａグループと合流し、久し振りに和食・日本酒を口にし、ホテルへ着いたのは 21：20 でした。

●ロンバルディア州政府を訪問（１９日）

時差(8 時間)にもようやく慣れ、ぐっすり眠ったのに少し早目に目がさめました。これまでは 2～3 時間おきくらいに目がさめていたのですが、やっと体が慣れたのでしょう。今日は 10 時以後でないと州政府の担当者の時間が取れないため、かなり時間に余裕があります。日本から持ってきた小説は飛行機の中で半分くらい読んだのですが、この日は朝から２時間ほど小説を読み、朝食後、ホテルの周囲を散策しました。ミラノは昨日までのストラスブールと違い、いたる所で日本人のグループに出会います。日本語の会話を聞いているとさすがに観光地だなと、感心します。

散歩の途中で気付いたことですが、世界各国の信号は、（赤）→（青）→（黄）→（赤）となるはずなのですが、ここは違うのです。（赤）→（青）→（青＋黄）→（赤）というように、黄色が単独ではなく、青の最後の部分に黄色が重複して点灯します。これは、黄色は気を付けて進めということを意味しているようです。日本では、進むことよりもむしろ、停止することに重点を置いていますから、日本とはすごい違いです。また、ホテルの近くで修理している超高層ビルは、ニューヨークの 9.11 テロ事件の直後に、軽飛行機が突っ込んだ建物で、一時は騒然となったようです。

←飛行機が突っ込んだ超高層ビル

２色同時点灯する信号→

ホテルに帰ると、ミラノで通訳をされる矢作泰子さんが来られていました。私たちは徒歩で、ロンバルディア州政府の建物へ向かいます。

ロンバルディア州では、州議会理事（№3）の ADAMOLI 氏や PEZZONI 氏、TURTURIELLO 氏らが応対されました。

開会冒頭に訪問団を代表して大前団長が、「イラクにおけるテロの犠牲となられた兵士とその遺族の方々に対して心からのお悔やみを申し上げる」と述べるとともに、今回の訪問の趣旨を説明し、併せて、「大阪とロンバルディア州との友好がさらに深まることを期待している」と挨拶しました。

アダモーリ氏は、歓迎の言葉の後、今イタリアでは国の権限を州や自治体に相当委譲していること、そのために法制度や税制面でも多くの改革が行われ、自治権が大幅に拡大してきていること、そしてそのことによって、地域の安全対策が大変進んだと述べられました。また、州は仕事の大半を住民のより身近な県・コミューン（市町村など）に委託し、州は立法機関的なものになってきていると説明されました。

№３のアダモーリ氏らの歓迎を受ける

例えば制度改革の中で、州自身の決定権を尊重するように税制面でも大改正が行われ、これまで国にだけしか入らなかった付加価値税の内、38.55%が州の財源となるようにされ、さらにガソリン税でも 70%が州の財源になりました。そしてすごいなと思うのは、州同士でも地域によっては大きな較差があるため、財政的に強い州から弱い州へ援助金を出していることです。ちなみにロンバルディア州は 60 億ユーロを出しています。

このようなことから、権限委譲の中で、保健・教育・地域安全の３点は国ではなく、州が最高責任を持つようになっています。

一方、調査団の議員からは、

①州の主要な税源と主要施策
②州政府の人件費は予算の内でどの程度を占めるのか
③ＥＵ統合によって、国と州にはどのようなプラスマイナスが生じているのか
④ミラノコレクションへの取り組み
⑤ロンバルディア州とミラノ市との間で二重行政はないのか
⑥中小企業への具体的な施策はどのように展開しているのか
⑦ＥＵと 2001 年のイタリアの諸制度改革の関連はどうなっているのか
⑧余りにもひどい路上駐車の対策はどうしているのか

などについて活発な質問が出されました。

◆ スローフード運動を学ぶ

この後ホテルへ一旦帰り、気軽な服装に着替え、イタリアにおける「スローフード運動」の調査に出かけます。

これには運動に関わっておられるピエトロ氏が同行され、写真のような郊外のレストランを訪問。スローフード運動の歴史や最近の実態についての説明を受けた後、調査団全員がその食事をいただきました。結構ボリュームもあり、今までレストランなどで食べた料理に比べると少し薄味で、食べやすいものでした。

ピエトロ氏は、なぜイタリアでこのような運動が起こり、世界各国で現在７万人を超える人たちが

スローフードのレストラン

食材にはレンズ豆をよく使うようです

運動に参加されているのかを解説されるとともに、環境に配慮した食文化の伝承をどのような形で進めていくのかなどを熱心に語られました。

現在の食生活、ハンバーガーなどのファーストフードを見直そうとして始まり、「ファーストVSスロー」からスローフードと呼びはするものの、食事の時間をゆっくりというよりはむしろ、自然の食材を生かし、環境に優しい「食」文化をどのように築くのかということの方が主になっているとのことです。中でも、次代を担う子どもたちには、より一層の理解を深めてもらうため、教育の観点からも働きかけをしているとのことです。

今日、わが国では、子どもも大人も朝の食事を抜いたり、手の込んだものを作らずに簡単なものを食べるという風潮が強まっているだけに、イタリアから始まったこの運動を、ぜひ日本でも本格的に進められないものかと感じます。普段は何とも思わずに済ませている食生活のことを、私たちはもっともっと深く学び、実践していかなければならないと思います。大阪府が呼びかけている「野菜バリバリ……」の運動は、その意味では極めて重要なものです。

ホテルへの帰路、レオナルド・ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」を15分間、見学しました。あれだけ有名なものだけに、どれだけ大きな建物の中にあるのかなと思っていましたが、案内していただいたのは、「エ-っ、これが？」と言うほどに質素で小さな建物です。サンタマリア・デッレ・グラーツェ教会の修道士の食堂に使われていたものとか。何度も何度も修復工事を繰り返してやっと完成し、往年のレオナルドの表現したものと大差ないようになったとのことです。少し暗めの部屋の中で、僅かの時間では有りましたが、緊張しながら鑑賞しました。レオナルドの遠近法をはじめとする描写法にはただただ感心の一言です。

●現地日本企業関係者との懇談（１９日　夜）

この日の夜はジェトロ･ミラノセンター所長で在イタリア日本人商工会議所事務局長の加戸宏司氏、同副会頭で伊藤忠イタリー会社社長の農守義文氏、同理事でＴＭＩヨーロッパ(帝人系)社長の福島敏秀氏らと、調査団一行との懇談会・夕食会を行いました。

お忙しい中、時間を割いていただいた３氏から、日本企業のイタリアへの進出状況や、不況下でのミラノ経済についての説明をお聞きし、意見交換を行いました。

私は以前、オーストラリアを訪問した際に、現地の日本企業関係者と懇談し、その時、価値観・国民性の違いから「このまま日本へ帰らずにここで永住したい」と言われたことを思い出し、この日は３氏がどんなことを話されるのかと期待していました。

ここイタリアでは、各企業は日本のように系列で整理されているのではなく、「中小の企業がそれぞれの個性をどれだけ発揮できるのかということで成長してきた」と言われ、さらに「日本なら、誰かがＡと言えば多くがそれに倣ってしまう。あえて異論を述べようとしないし、それが美徳のようになっている。イタリアはそうではなく、Ａがａといえば、隣にいるＢはｂだと言うし、Ｃもｃと言い、Ｄはｄと言うのです。自分自身は決してＡやＢと同じではないということを強調し、異なっていることに誇りを持っています」とその国民性の違いを述べられました。また、そのような個性が今日のイタリア経済、とりわけミラノ地域の様々な中小企業を支えていると言われ、だから会議をやると、日本と違い、大変な議論が続くそうです。

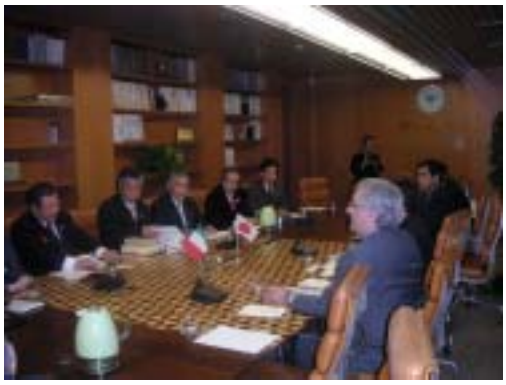
私の着席したテーブルの福島氏は、「私の会社は日本人スタッフが現在４人しかいない。約 100 人は全部イタリアの人なんですよ。だからいろいろ議論することも多いですが、結構楽しくやっています」と、語られました。ミラノの人たちが世界のファッション界をリードする秘密は、そんな個性豊な強い自己主張とエネルギーにあるような気がします。

●ＵＣＩＭＵイタリア工作機械協会を訪ねる（２０日）

この日は午前中にウチムを訪問し、午後からは最後の訪問先のプラートへ移動するため、早朝から荷物や書類を整理。8：30 にチェックアウトし、ミラノ郊外のウチムへ向かいます。

また今回の調査期間中、ＪＴＢの添乗員として同行しているＨ君が思いもかけない交通事故に遭遇したため、今日からは関係者が交代することに。Ｈ君の一日も早い回復を祈ります。

10 時過ぎにウチムに到着した私たちは、副代表のギアンカルロ・ロスマ氏らのお出迎えをいただき、さっそく説明を受けました。



モノづくりの町＝大阪の再生を果たさなければと思い、このウチムを選択した私たちは、イタリアの工作機械産業の状況とその成功の秘訣などを熱心に学びました。

イタリアの工作機械産業（工作機械・ロボットなどを製造）は、生産・輸出ともに世界第 3 位で、企業の大半が 70 人程度の従業員を擁する中小企業で占められています。海外への進出も含め、その成功の秘訣は、

① フレキシビリティ（柔軟性）

工作機械そのもののみではなく、これを作るメーカー自身に、市場の要求に具体的に対応できる柔軟性を備えている

② 先進的テクノロジー

世界的なレベルでも、特に機械部品の分野では開発力がある

③ 問題解決への高い能力の保持

顧客が抱えている問題に共同で解決策を示し、設計・製作まで一貫して担い、満足を得ている

ことにあると、同氏は力強く語られました。

これに対して調査団からは、

① ＴＬＯという大阪が進めている制度をイタリアではどのようにしているのか
② 日本では成熟社会となった今、教育・福祉などの分野での投資が進んでいる。イタリアはどうなっているか
③ 中小の各企業が共同で研究・開発を進めていくことは素晴らしいことであるが、知的財産の所有などについてはどうか
④ ロンバルディア州と大阪の今後の交流のあり方

などについて質問するとともに、逆にウチム側からは、

① 日本経済の動向、とりわけ大阪経済は現在どのような状況なのか
② 日本における各企業の現在の就労形態
③ 年金問題などへの将来の不安

などが尋ねられ、調査団からこれらを説明するということがありました。

今回の訪問を受けていただいたロスマ氏は、「私の会社も実は工作機械を製作しています。そして日本にも少しですが、輸出しています。だから、日本経済にも大変な関心を持っています」と言われ、大変な親近感を持ちました。

私たちはこの後、昼食をとり、バスでプラート（フィレンツェの近く）へ向かいます。バスは現地まで、約４～５時間かかるとのこと。大変な行程です。私たちが３日間滞在するフィレンツェの高台にあるホテル・ビラコーラに到着したのは何と、午後７時。本当に疲れました。荷物を受け取り、部屋で着替えを済ませ、ホテルの地階で夕食。終わったのは9：30を過ぎていました。

◆ミラノで気付いたことを少し

A　コーヒー事情

最初の調査地のストラスブール（フランス）では別に何とも思わなかったコーヒーが、イタリアへ来た途端に大変化。私たちが日頃飲んでいるコーヒーはまず出てきません。普通のカップの1/3～1/4くらいの大きさのカップに、底溜まりの様なエキスだけのエスプレッソと、倍くらいもある大きなカップに入ったカプチーノが主流です。中でもイタリアの人たちは、エスプレッソをよく飲んでいるように思います。

根っからのコーヒー好きの私もほとほと困り果ててしまいました。調査団の訪問で、その懇談の最中に出されるエスプレッソが余りにも濃いため、仕方なく、目の前に並んでいるペットボトルの水を入れて薄めたら、何とこれがガス（炭酸）入りの水。ああ、ヒドイ、なぜこんな目にと思いながら、やっと半分程度を飲みました。次からは帰るまで、カプチーノにし、それと、水のガス入り・ガスなしに注意の毎日でした。

B　交通事情

日本よりも比較的広いと思えるイタリアの道路も、言葉では表現しきれないほどの駐車のため、1台の車が通行するのが「やっと」だという状態です。聞くと、個人が新しく車を購入する場合でも、

一切、車庫があるかないかは関係なしだとか。日本では車庫証明が絶対に必要というのとは根本的に違います。ですから、道路には二重、三重に、そして縦・横・斜めと停め放題。警察署もほとんど違反の摘発をしないようです。車によっては一体いつから駐車しているのかと思うような「埃・落ち葉」がたっぷりというひどい車であふれています。

C　美観と街の事情

イタリアの「まち」は、ミラノやフィレンツェだけではなくどこでも、街そのものが、また建物そのものが歴史を刻み、まるで博物館のようだと言われます。しかし、そのミラノがよくぞここまでと嘆くほどに「落書き」で汚れきっています。世界に誇る歴史観光都市がなぜこんなに……と、私たちが思うほど、こちらの人たちは考えていないのでしょうか。何百年も前に建てられ、他国ならきっと国宝級の扱いを受けるはずの歴史的遺産・建造物が、余りにも無残な姿を晒していることが残念でなりません。

そして、もう一つ。レオナルド・ダ・ヴィンチやミケランジェロ、ラファエロ、ボッティチェルリなどのすごい芸術家が残した数々の名作が、「エッ、こんな所に？」と思うような所にあります。一般的に、受胎告知やヴィーナスの誕生、春など、学校の美術や歴史で誰もが教わったすごい物なら、堂々とした建物がそびえ建ち、その中に厳重に保管されていると思ってしまいます。しかし、ここミラノでは、(フィレンツェでもそうでしたが)まるでどこかの倉庫の入り口かと思うような所から入場します。「文化は私たちの生活の一つとして溶け込んでしまっている」と、こちらの人に言われればそれまでですが……。

D　ファッション事情

ミラノは世界のファッション界をリードし、またその中心だとよく言われます。だから街行く人はどんな服装かなと関心を持っていたのですが、さりげないもので、日本国内と何一つ変わりません。むしろ、ミラノの町の中には日本国内で見るようなブランド物で身を固めて歩いている人などは皆無です。逆にブランド物のバッグを肩に、余り似合っているとは思えない服装で歩いている日本人の方が目立ちます。自分の意思でというより、周囲の人が持つから自分も欲しいという日本人は、イタリアは勿論、海外の人から見れば「お金儲け」の対象として笑いが止まらないでしょう。自分自身の主張をきっちりとするイタリアの人たちは、決して他人の真似をせず、ファッションにも個性が溢れています。厚いコートを着用している人がいるかと思うと、隣には肩が見えるほどの薄着の人がいたりと、それぞれが自由にその場にあわせて自己主張しています。それが街そのものを高めているのでしょうか。日本人のブランド志向は異常とさえ言えるでしょう。

E　イタリアの料理事情

好きな人にとってはたまらないイタリア料理。しかし私たちが滞在し、食した料理は「まずい」とは言えませんが、私にとってはどうももうひとつ「すっきり」とはしませんでした。

素材は日本とそんなに変わりはしませんが、とても味が濃いのです。もちろん、家庭の味を体験したのではなく、限られたホテルやレストランでの食事ですし、短期間のことですから、これで評価するのはおかしいと言われるかもしれませんが、これまで私がドイツやオランダ・フランスなどのヨーロッパ諸国でいただいた時の方が、ずっと良かった気がします。そして、私がまだ食べているのに、声もかけずに勝手に皿などを下げてしまうことが度々で、調査団のメンバーも少しムッとしている人がいたことも事実です。私も一度ならず二度・三度と「NO」と言ったことを覚えています。特に、スローフード運動を取り組んでいる所でさえこれですから、難しいものです。そしてこちらの人はよくあれだけ食べられるな？というほど食欲旺盛です。(私は本当は、「アルデンテ」のスパゲッティが食べたかったのですが‥‥。内緒･内緒)

●プラートの繊維産業振興策を学ぶ（２１日）

この日はフィレンツェ近郊のプラート市のプラート産業連盟（ＵＩＰ）を訪問します。30 分以上かかるということで、8：23 にホテルを出発。今日からのプラートでの通訳はフェラーラ礼子(旧姓・中條)さんです。9 時過ぎに連盟本部に到着した私たちはさっそく、ジョバンニ・メスキーニ氏とバーバラ・ビガリさんの出迎えを受け、説明を聞きました。

素晴らしいトータルファッションで出迎えていただいたお二人

イタリアの全繊維製品の 80%はここプラートで作られ、その製造会社のほとんどが中小企業です。また製品だけではなく、「糸」そのものを作っている会社も数多くあります。トスカーナ州は人口 100 万人で、その内プラートは約 30 万人を占めています。

プラートは最初、ウールを中心に製造してきたものの、今ではその比率が 15%にまで落ち込んでおり、ポリエステルや人工皮革などの占める割合がぐんと伸びています。プラートは元々、再利用が盛んで、その対象となる客の所得階層は割合低かったようです。今でも年間 4 万トン以上の古着がここに集められ、脱色したり繊維だけにしたりして新しい製品に生まれ変わらせているとのこと。これまで生産量は 1 年で約 55 億ドル、その内、輸出には 33 億ドル(約 60%)となっていましたが、最近は輸出の比率が 65%にまで上がり、120 ヶ国を相手にしているという説明に、調査団は驚き・感心の様子でした。

特に、バーバラさんは説明の中で、プラートの中小企業はどこでも、「セールスマンはただセールスするのではなく、客の立場からこのような物をつくって欲しいと工場関係者（生産者）に依頼し、できあがった製品を客に勧めて拡大していく」と中小企業の持つ柔軟性とこれにかかわっているイタリア人の個性豊かな熱意ある仕事が、プラートの強いところで、全ヨーロッパ №.1 にしたと述べられました。アルマーニやベルサーチも元々、そういったことで成長してきたようです。

一方、調査団からは

1) デザイン性、ファッション性を高めるためにはどのような事をしているのか
2) ミラノコレクションとの関わりは？
3) 一回の展示会でどれだけの企業がどの程度出品されるのか
4) 素材の研究はどのようにして進めているのか
5) 中国製品との関係はどうか

などを取り上げて意見交換を行いました。日本でも安い中国製品の進出に困っているように、今やプラートでも日本と同様に大変困難な状況にあるようです。

しかし、日本のように、その原因である人件費の抑制のため、中国や東南アジアなどにシフトを移すなどということは考えず、「個性豊かな顧客を満足させる製品を作り出すための様々な工夫に努めることのほうが大切だ。ニット製品の中でこれだけ薄い生地を作り出せるのは世界中でもプラートだけだ」という自信を持った答えには、本当に敬服します。

●現地企業を訪問

この日はまた、昼前からプラートの現地企業ＭＴＳ社を訪問し、社長のローランド・パスケッティ

さんらの出迎えを受けました。

ローランド・パスケッティ社長は

① この会社は医療・建築用内装品も扱っている

② 若いスタッフが大変な努力をし、これが実を結んだ

③ 規模は 80 人で、他企業よりは少し大きい

④ 中国製品が大量に輸入されるようになり、困っている

⑤ 今日の世界経済の悪化原因の一つは中国製品の席巻だ

⑥ 日本の旭化成から輸入している紙を利用して人工皮革の研究を深めている

ことを述べられました。

訪問した MTS 社

パスケッティ社長にお礼と記念品を渡す中村府議

この会社では古着などを一杯集めていた

私たちはこの後、人工皮革の研究現場や染料の調合、さらに展示会などに出される数々の生地見本を拝見しました。繊維産業のおかれている厳しい状況を目の当たりにし、泉州地方の厳しい現状がダブり、複雑な気持ちでＭＴＳ社を後にしました。

ここで感じたのは、ＭＴＳ社は日本の工場と比較的よく似ていましたが、敷地・建物が広いため、80 人もの人がどこで働いているのか？と思ったほどです。さらにどのような環境対策がされているのか詳細はわかりませんが、工場の横を流れる川もそれほど汚染されているようにも見えず、この面でも相当な苦労があるように思えます。安い人件費を求めて海外へ展開していく日本とイタリアの違い、職人気質、歴史・伝統など様々な違いを見聞し、これからの日本は一体どうすればよいのか、複雑な思いを持ちました。

●繊維博物館で見聞を広める

この日はプラート産業連盟での懇談の後、午後からは現地企業訪問・懇談になっていましたが、予定よりも案外と早く終了したため、明日の午前中に訪問する予定になっていた繊維博物館へ向かいました。途中にかなりの規模のチャイナタウンをバスから見、イタリアにも有るのかと驚きました。

３時前に繊維博物館に到着し、館内の展示品などをご案内いただきました。この施設は 1975 年にオープンしたもので、個人コレクターの提供で出来上がっています。1800 年代からあった工場敷地が

10,000 ㎡を超えており、ここに 1860 年に、染色を中心とした織物工場がつくられ、その工場施設をそのまま転用したため、当時の織機を始めとする様々な繊維関係機器も保存されています。

これが繊維博物館の入り口です

館内には３～4 世紀頃の布地や衣服（ウール・綿・麻など）もあります。遺跡の発掘で出土した物も展示され、またそれらの絵柄などの多くが「キリスト教」に関するもので、まるで教会の中の資料を見ているようです。またルッカ地域で作られ、イスラムの影響を強く受けた衣服も一部ですが、展示されています。

フィレンツェの地域でよく使われていた高価な生地（シルクをベルベットのように見せる 14～15 世紀の生地）なども飾られ、当時は家具やインテリアにも多用されていたようです。

16 世紀に入ると格段に技術が進み、近代と同様の高価な絹製品などが目立ってきます。特にこの当時、フランスのリヨンで作られる製品は花柄や立体感があり、先進的で技術力も高く、多くの人がリヨンに学び、帰国した人々がいろいろな工夫をこらして各地へ広めていったようです。

また 19 世紀に入ると、プリント技術が導入されたことから、織り込んでいくのではなく、上からプリントするために様々な濃淡・デザイン・絵柄が表現できるようになっていきます。室内は写真が厳禁とされているため、これらのことを言葉で表現することは本当に難しく、適切に表現できているか分かりませんが、ご理解ください。

２階へ上がると、中世から今までの織物機械を展示しています。またその側で、2004 年に発表される予定の極薄の生地も置かれています。さらに、同じ素材を使ってどれだけ感触の違う物が作れるのかというコーナーや、防弾用の生地なども展示されています。実際に触れてみて、こんなに感じが違うのかと驚く物もありました。

そして、西暦 2000 年を祝う大聖典の際に、ローマ法王が着用された衣が、それを伝える新聞写真とともに展示されています。衣は赤・金・青などで煌びやかな物ですが、その材質がビスコースやアルミニウムであると聞かされて、私たちはすっかり驚きました。約 2000 年前、人の手によって素材を自然のままに使用し、さらに工夫をこらし、近代科学の発達の中で、それを様々な形に活用・変化させてきた私たち人類の歩みに、何か遥かなるものを感じました。

●ルネッサンスの文化に感動（22 日）

今朝は、繊維博物館を訪問する予定になっていましたが、昨日の日程の関係で変更になり、午前中、かつてのフィレンツェの名門貴族・メディチ家の事務所を改装した「ウフィッツィ」美術館を訪れました。土曜日のお休みで、大勢の人たちでいっぱいです。私たちも予定変更ということでの訪問のため、入場するのにかなりの時間を待たされました。このウフィッツィでは公平性を保つために、早くから予約をしている人たちが来ていても、一般客として並んでいる多くの方々を順番に少しずつ入場させるため、予約をしてあるからといっても、そのとおりには入場できないようです。日本人のツアー客も相当おられ、日本語で解説されている風景があちこちで見られました。好きな人で時間があれば１日中でも飽きのこない美術館だと言われていますが、私は時間の関係で、入場したときに解説本を購入し、おぼろげながら記憶にある「春・ヴィーナスの誕生・受胎告知など」、ダ・ヴィンチやボッ

ティチェルリ、ラファエロなどを、解説書の案内図のとおりに急いで回り、ミケランジェロのダビデ像も鑑賞しました。

ウフィッツイ美術館の前は観光客が一杯。中も外も正に美術館です

その後、ホテルへ帰り、帰国に備えての荷物と書類整理などを行いました。数多くの場所を訪れ、様々な方々から沢山の資料をいただいたため、バッグがパンパンです。

イタリアでの最後の夕食は、フィレンツェの人たちが自慢する「TAVERNA DEL BRONZINO」へ。これまでのレストランとそんなに変わることはなかったのですが、初めて家族的な雰囲気の店にあたった気がします。

今夕の食事は、全員で食事する最後ということで、大前団長が、全員に「この１週間、大変ご苦労様。最初の２日間はＡグループ、Ｂグループの２班に分かれての調査であったが、ともにハードスケジュールの中を本当にお疲れのことと思う。今回の調査は、当初の計画以上に大きな成果が上がったことと確信している。この成果を大阪へ持ち帰り、府政の中に生かしていこう」と挨拶されました。

私も本当に、何か疲れたという感じと、ホッとしたというのが混ざり、調査団全員で感じたことを語り合いながら、国情の違い・国民性・文化など、盛り沢山の話題で、お互いに「ご苦労さん」でしたと、楽しく懇談しました。

◆フィレンツェで気付いたことを少し

Ａ　自動販売機がない

ミラノでもプラート、フィレンツェでも、日本の町の中や道路沿いに置かれている「自動販売機」が全くといってもいいほど置かれていません。ペットボトルを出来るだけ使用せずガラス瓶を使い、デポジット制を推進する動きも復活しているようです。人と人が対面して会話の中で物品の販売をすることが文化だと自負していることと、かつて自動販売機が置かれだした頃、設置すれば破壊されるということが続き、被害が大きく、次第に自動販売機を敬遠するようになったことも原因のようです。

Ｂ　タバコがやたらと高い

日本でも喫煙者が次第に減少してきていますが、ここイタリアでは、何とタバコ１箱が平均600円程度します。調査団にもヘビースモーカーがいましたので時々、現地で日頃慣れているタバコを購入するのを見ていると、何か気の毒な気さえします。そして、ガイドがイタリア語で書かれた注意書きを見せて、「タバコのケースには、日本のように、『健康を害する恐れがあるため吸いすぎに注意しましょう』などというぼかした書き方ではなく、『がん』『死亡』などの明快な言葉で注意することが義務付けられているんですよ」と説明。どちらが良いか一目瞭然です。

Ｃ　ドゥオモよりも高い建物がない

神様の家・ドゥオモ(カテドラル)が町の中心にあります。古い由緒ある建物も時には建て替えられたりしますが、建物のこれまでのことが分かるように残していることと、高さはその地域のバランス

を守り、異常なほどの高層ビルは建てません。日本でよく揉めている建築物の高さ・日照権問題などはまったく起こらないようです。キリスト教の教義がイタリア国民の日常生活の中にしっかりと溶け込んでいるのでしょう。

D　食事の時間が長く、客が注文したメニューを出さない

イタリアの食事スタイルは、正直言って合いません。私たち日本人は、とりわけ関西人はあれほどの時間をかけて食事をすることなど、「無理」です。そして性格的にも合わないでしょう。食事に対する考え方と文化の違いといえばそれまでですが、私は本当に「間」が持ちませんでした。

そしてもう一つはっきりしているのは、イタリア人の仕事への誇りと性格を、客に対してもストレートに表現することです。例えば、私たち調査団のメンバーのＡ氏がメニューを見て「Ｘ・Ｙ」を頼むと注文し、他のＢ・Ｃ各氏もそれが美味しそうだからとそれを依頼します。日本なら同じ物を注文されたら手がかからずに楽だと思うはずですが、こちらは様子が違います。自分たちの自慢の料理を「披露」できないからと、Ｐ・Ｑも食べてみよと注文変更を求め、我々が変更せず同じ物でよいといっても、試しに食べてみてほしいと違う物を出してきます。こんなところがイタリア人と日本人との違いでしょう。日本でなら「何だ、これは」となるでしょうが、不思議に腹が立ちません。

しかし、これとは別に、イタリアの人は本当によく食べます。ラテン系ですから、イギリスやドイツのように大きくなく、背丈も日本人とそんなに変わりません。だけど食事量だけは別。とてもついてはいけません。

●多くのことを学んで帰国（２３～２４日）

23 日はいよいよ日本へ帰ります。早朝 5：30 のモーニングコールになっていましたが、不思議に 5 時過ぎに勝手に目が覚めました。朝の時間が余りないのでと、前夜にほぼ荷造りを終えていましたので、洗面などを済ませるとすぐにバッゲージダウン。チェックアウト後に簡単な朝食をとり、バスに乗車し、フィレンツェ空港へ向かいます。空港にはきっちり 8：00 に到着。9：30 発のＬH5567 便に搭乗のための諸手続きをしますが、ここも日本を出国の時と同様に、手荷物検査などに相当な時間がかかるため、余裕の時間はそんなにありません。手続きなどが終わって搭乗し、離陸すれば約１時間でドイツ・フランクフルトです。機内では軽食なども配られますが、私は健康管理のため、ホットコーヒーを１杯飲むだけにしました。朝からビールだワインだといって飲む人が結構多いですが、私は朝からアルコールを欲しいとは思いません。10：30 にフランクフルトに到着し、ここで関空へ向かう飛行機に乗り換えです。

ＥＵ出国の手続きのため、パスポートと搭乗券を出しますが、今までのようにスタンプを押しません。(ヨーロッパなどは今まで、ドイツ・イギリス・フランス……というように入国・出国のスタンプが一杯押され、あの時はこんな所へ行ったなあと、パスポートを見るたびに思い出に浸れたのが、もうダメになりました)　今回のヨーロッパでパスポートへのスタンプは日本を出国の時、フランクフルトへ着いた時、日本へ帰った時の 3 つしかありません。

フランクフルトは午後１：00 出発のため、比較的時間に余裕があります。免税店で買い物をしていると傍らに、日本語の新聞(朝日・日経)が置いてありました。漢字に餓えていたのか、早速その２紙を購入すると、何とこれが 7.9 ユーロ(日本円で約 1,000 円)です。

ＬH740 便には 0：40 に搭乗となっています。日本まではノンストップで約 11 時間 30 分かかり、日本到着は深夜の 0 時 30 分頃(日本時間では 24 日の朝 8 時 30 分)の予定です。

このＬH740 便も、大阪を出た時のＬH741 便と同様に、満席です。エコノミー・ビジネス・ファーストのどのクラスも満席だというのは、やはり、厳しい航空業界の中で、関空への直行便から撤退していく航空会社があり、どうしてもフランクフルトやアムステルダム(オランダ)などに集中せざるを

得ないからでしょう。

A52 ゲートから搭乗し、午後１時過ぎに離陸。数分で水平飛行に入りリラックス。帰国便の中では、この１週間余りのことを少しでも整理しておこうと、２時間ほどメモをしたり、写真や書類を整理します。そして、私自身が旅日記のようなものを書くのが好きですから、ミラノやフィレンツェなどのことを思い出しながら、ゆっくりとまとめていきます。(良い思い出も、腹の立つことも……)

大聖堂から見た美しいストラスブール

ストラスブールは本当に美しく素晴らしい町でした。近代的な建築物と、中世の面影をしっかりと残したカテドラルなどが見事に調和し、何度も繰り返されてきた独仏の国境争いの名残。そんな中で市民の足を確保するために車を締め出し、強力なリーダーシップを発揮して「まちづくり」を進める政治家たちの姿に、私は大きな勇気を得た気がします。

何年か先に再び訪れることがあるかもしれませんが、その時はＥＵ合衆国の首都であるかもしれません。全ヨーロッパの垣根がなくなり、民族・宗教を越えて、世界の平和をリードする存在であってほしいものです。

ミラノ、プラート、そしてフィレンツェは、ストラスブールとはまったく感じが違っていました。ミラノでもフィレンツェでも、見る建造物すべてが何世紀と経つ貴重なもの。それが余りにも無造作に置かれていると思うほど、存在します。町そのものが歴史であり文化であり、博物館なのでしょうか。観光ツアーで来ていたら、もっともっと時間をとって深く楽しめたのですが、これは仕方ありません。だからこそ、あのひどい落書きとゴミ、迷惑駐車は、ミラノやフィレンツェの貴重な文化遺産と街並みを壊しているだけではなく、イタリアと世界の国の人々の心をも傷つけているとしか言いようがありません。

しかし、「なんでも右へ倣え」、「事なかれ主義」を大切にするわが国と違い、イタリアは個性・多様性を尊重し、自己主張が見事な国だと感心します。良い学校へ入り、良い企業へ就職してという考え方が昔ほどではないにしても、まだまだ根強い日本と、お金や肩書きではなく自分自身がやりたい仕事を選びそれを誇りに思うというのがイタリア人だと、その違いをイタリアの方々からだけではなく、イタリアで活躍されている日本企業関係者からも伺い、大変な勉強になりました。服装・ファッションでも、なるほどと思うことが度々でした。

帰国便では最初とは逆で、不思議にテレビやビデオを見ようとは思いません。食事などでも、体が結構疲れているため、軽めにし、アルコールも一切口にしませんでした。時差のため、日本へ着いたら大変だと思いましたが、機内では２時間程度しか休息できませんでした。

日本に着く２時間程度前、真っ暗だった機外がぼんやりと明るくなってきたなと思うと、日の出です。

毎日毎日繰り返される光景でしょうが、飛行機から見る朝一番の、僅かな間のその美しい瞬間に我を忘れます。疲れもどこかへ去ってしまいます。

関空には 24 日午前 8:20 に到着。入国手続きなどを終え、解散。7 泊 1 機中泊の調査団の日程は全部終了です。

☆苦言を一言

海外での満足感を測る度合いは「通訳・ガイド・ホテル」だと言われます。しかし、今回はホテルに満足感は少なかったと思います。「トイレの水が流れない」、「出る水は真っ茶色」、「廊下や部屋の足音が響く」ということを始め、モーニングコールを忘れる、チェックアウトをしようとしても、「人がいない、金庫が開かないからつり銭もない‥‥」という有り様です。ホテルの質・サービスの度合い以前の問題として、残念でなりません。

さらに、ホテルの利用客の何割かは日本人です。それなのに、ＴＶ放送はまったく日本語がありません。なぜ、ＪＴＢや日本旅行・近畿日本ツーリストなどの大きな旅行会社はこれに注文を付けないのでしょうか。日本外交がいつも弱腰だと批判されているのと同じではないかとさえ思います。

また、現地の通訳にも少し不満があります。良い思い出を残し、大きな成果を上げるためには、通訳の腕(本当は言葉)が問われます。まして、議会の調査であり、一般的な旅行ではありませんから尚更です。相手の説明を私たちにどう伝えればいいのか、迷われることが時々あり、少し気の毒だなとさえ思いました。

☆最後にもう一言

フランクフルトへ着いてから、通訳に、「フランス・イタリアへ行かれるのですから、気をつけてください。日本人は文句を言わないから、思いもかけないようなお金を騙し取られることがありますよ」と言われました。案の定、１日目のホテルで、１人 15 ユーロで約束した料理が精算の段階で 22 ユーロになり、約束が違うと文句を言うと、これでよいのだと答えます。「これは違う。こんなお金は払えない」と、2 度・3 度言うと、「ＯＫ分かった」と言って修正した請求書を再提示。何と約半額です。欧米人はチェックアウトの際にも、細かく中味を見た上でしか支払いませんが、日本人は横文字が並んでいると、ほとんど無条件でそれに従う傾向があります。海外で日本人はお金持ちで文句を言わないので、扱いやすいといつも言われているというのは本当だと思います。

☆事務局やお世話いただいた皆さんに感謝

今回の海外調査で、ずっとお世話いただいた府議会事務局の皆さんには心から感謝します。とりわけ、四宮・石田両氏には特にご苦労をおかけしました。また、出発までに、イタリアの事情やＬＲＴなどについて、多くの方々にご指導いただきました。大きな成果を上げることができたのも、皆さんのお蔭だと感謝しています。